

立冬

『新壘』44-1号

亡夫の年齢としはるか超え来しこの優位灼けゆく夕べの空に眩
しむ

死と云ふを身近かによせて思ふときポプラ裸木の羨しき佇
立

変型の柩にありし吾が亡骸の夢に眼醒めてけだるき五体

朝の陽の僅か届ける位置占めて猫の眠りのやさしき立冬

意為を重ねきしやうに歳日剥がさずに日曆の今日寒き立
冬

禱り

『新壘』
44-3号

言葉みを浄化されゆく形にて雪に埋もるる電話ボックス

為すすべもなく腕垂らせるる私に風景の冬樹のなべて直立

いくばくの未来はあらむと禱りつかぐはしきかな徒勞と言
ふも

こころ汝に及ばぬ日はなしと書きて嘘のやうなる封書が白
し

うき
呼吸の乱れつひに整へ涉りゆく橋はまこと吾の幻

冬原

『新壑』

44-4号

落日のはげしき炎につまれるて裸木よ言葉持たば怖るる

角度換へふたび進む除雪車の散らせしものを纏ふかなし
み

錯誤とも杳き記憶のうつろひに冬の花火は華麗にとどむ

呼び馴れていつか互みのものとなる対き合ふ位置にゴムの葉
稚し

冬原に一樹立つ故しみじみと捉へしものは平安に繫く

残雪

『新墾』
44-5号

暁闇を轟きゆける除雪車の音捉へし
のちの長き耳鳴り

白樺は際立ちながら雪中にたじろぐ
意志のひとつを曝らす

斑ら雪残れる野の原からみ合ひ
絡みあひつつ風の墜ちゆく

まなそこに遺るひとつの修羅ありて
冬の未明を昏昏と睡ら
な

無形にもどしゆくものにしてたど
たどし氷柱いつ本鋭く織
る

残光

『新壑』
44-6号

花の棘言葉の刺ぞ夥し一月より冥く冷ゆる三月

吾が意志のたじろぐ程に炎群なし冬しまらくの夕茜なり

限りある華麗と云はな背に亨けて帰る夕光はやくも衰ふ

かげ

残光の刻の脆さに立ちながら明日ふまへゆく足の確さ

晩春の翳れる丘を駈けゆける黄のジャンパーのくまなく明
るし

煌き

『新壑』
44-7号

街川の流れに沿ひて歩みゆき今日のくやしみは今日にとど
むる

さまざまな人の愛しみも知りつくし均衡保てる春の体重

羞しき裏切りもあらむ夕映えの翳れる部分にこころ疲れ
て

そそくさと禱れば指の間より冷ゆ繋ぎゆくもののおぼつか
なくて

連翹の黄の煌めきに暫くを支へられるて春の貧血

雨季

『新壑』
44-8号

連翹の黄の煌めきに立ち眩む頭上ひとつそりと真昼陽はあり

うち

花舗には花内部には愛しみの溢れ充ち雨季のあかりはみつ
みづ灯る

林とはやしを繋ぐ風荒れてあそびの如く吾も揉まるる
も

妖しきまで暮れきらぬ空のただよひにひとつ謐かなり鉄線
の花

月光の及ぶかぎりを立ちつくし何程も耀やかぬ吾が智慧

夏の匂ひ

『新壑』
44-9号

張り替へし障子に充てる陽の匂ひ
無能なる言葉も美しく
らむ

暗緑の夏空ながらしんと延びゆくものにひそむ
岡魂

夏に赴く日の夕ぐれをとりわけて
草にも樹々にも言葉飾りぬ

夏帽に無数の蝶をどじこめて
酷暑過去持つ吾の幼時期

旅にかたむく今日のこころを確むる
駅舎の屋根が雨に明るし

夏に残す

『新壑』

44-10
号

遠く来て会ふ昂りりよ陸橋を渡る半ばの風まつはりぬ

うつうつと人の嘆きに沿ひゆけばしつとり重たき夜の草原

丘の道歩みて手折る子モシーよ短かき夏にもの思ひなく

しづまらざるころのままに入りゆく疎林に樹液のひた匂
ふかな

いくらかの坂に息きれて来しことも話題之しき家を賑はす

言葉奪はるる

『新壘』
44-11号

地上より粗き風吹く屋上ぞ言葉みじめに奪はれてをり

さはやかな夏の終章とききとめぬはづす風鈴のかすか鳴る音

草なればたやすく踏まむこの朝怠りもなく夏陽かがよふ

陽の温みいまだ残れる草に坐すひと世の業苦も感傷に似て

いねぎはの髪解かするる掌の冷えを鋭き孤独の自らに告ぐ